

## トップエスイー修了生インタビュー：徳本 晋さん（富士通株式会社）

2007年3月、トップエスイープロジェクトの第一期生12名がめでたく修了しました。第一期生の多くは協賛企業からの推薦応募者や大学院学生でしたが、一般受験による受講者が2名いました。今回、その一般受験受講者の一人である徳本晋さん（富士通株式会社ネットワークサービス事業本部にご所属）にお話を伺いました。

### ー トップエスイープロジェクトに応募したきっかけは何ですか？

入社以来、社内の標準的な開発手法や開発環境を使い続けてきましたが、アジャイル手法などの新しい開発方法論や、革新的な開発技術を横目で見つつも、実際の開発に適用できていないことに歯がゆさを感じていました。このままでは、世の中の動向や研究成果など最先端の情報から、開発現場が遠のいてしまい、ギャップがますます大きくなると危惧していました。現状を打破できるものは何かないか、開発現場に活かせる手法は何かないかと思い、トップエスイーに応募するに至りました。



### ー 受講することになって説明会の話などを聞いたとき、最初の印象はどうでしたか？

正直なところ、何を言っているのか、何をやるのかさっぱり分からない！という状況でした(笑)。まず、キーワードレベルで理解できません。ゴール指向？ i\*(アイスター)？ モデル検査？ Bメソッド？ こんな状況です。大学在学中にはコンピュータサイエンスの基礎を勉強し、理解もしていたつもりでしたが、トップエスイーで扱われているトピックの幅が広く、既存の知識だけではとても対応できませんでした。UMLも耳学問の範囲で、実際の業務でモデリングしたこともありません。とにかく不安だらけで、本当に大丈夫だろうかという気持ちになりました。

とはいえ、やると決めた以上は、なんとかついていこうと決意を新たにしました次第です。

### ー いざ講座が始まってみて、どのようなことが印象的でしたか？

自分の知らない技術の世界がこれほどあるのか、と純粋に驚きました。例えば、これまでバグを取り除くにはテスト、デバッグ、レビューといった方法を用いていましたが、モデル検査によって設計仕様の段階で欠陥を検出するという考え方は、私にとってとても新鮮でした。

また、講座では様々な技術・技法を学びましたが、それらの背景、適用範囲、応用上の限界などを理解できたことも有益でした。その一方で、そうした技術を開発現場に適用する難しさもよく理解できました。これは技術論だけでなく組織論の問題もありますし、開発対象の規模や、開発プロジェクトの体制などとの適合性の問題もあるので、解決は容易ではありません。こうした課題を乗り越えて、ギャップを埋める努力や工夫がまだまだ必要であると感じました。

### ー 受講生として過ごした期間は楽しかったですか？ 課題や修了制作は大変でしたか？

おかげさまで、とてもエキサイティングな時間を過ごすことができました。社会人になってから勉強できることの楽しさ、目的意識・問題意識を持って受講することで得られる新たな気づき、自分とは異なる分野の技術者や学生との議論、そして新しいことを知る喜び。受講生や講師との人的ネットワークも、今や私にとっての貴重な財産です。

宿題はかなりタフでした。というのは、新たに学んだ知識や技法を理解するだけではダメで、それを使いこなして何かを実現することが要求されていたからです。慣れていない技法を駆使しなければなりませんし、自分としても納得して使いこなしたいので、どうしても多くの時間を必要としました。土日をもろもろ宿題にあてたこともありました（笑）。

修了制作も大変でした。私は、ネットワーク機器のログ解析システムを、ゴール指向要求分析技法とアーキテクチャパターン技法を組み合わせることで実現しました。システム設計からプログラミング、そしてレポート作成といった一連の作業を短い期間で行わなければならず、会社の業務を抱えながら修了制作をこなすのは一苦勞でした。鷺崎先生の手厚いサポートを受けながら、無事、システムの完成に至ることができてホッとしております。

#### ー 修了後、会社の業務で何かよい影響はでていますか？ 実適用の難しさは？

実際に適用できている手法はまだまだ少ない、というのが正直なところですが。しかし、何か適用できる場面はないかを常に考えながら、利用できる技法から順に適用を試みています。例えば、私が手がけた製品の機能と顧客ニーズとの関係をゴールモデルで示すことで、同僚から「とても分かりやすい」と評価されました。そのほか、UMLの適用範囲をこれまでよりも広げるなど、トップエスイーで得られた知識や経験を活用しています。サイエンティフィックな技法はまだまだ適用というレベルに至っていませんが、モデルや仕様を考える際のバックボーンになっているのだ、と思います。

一方で、私の開発現場では、プラットフォーム評価、既存システムへの追加仕様の検討など、新規ソフトウェア開発の作業比率はそれほど高くありません。トップエスイーで学んだ技法の多くは、新規ソフトウェア開発と適合性が高い内容であり、ハードウェアと一体となった製品開発や、既存ソフトウェアの再利用を前提とした開発に対しては、具体的なソリューションを提供しているわけではないように思います。こうした課題は、産学が連携して解決しなければならないと思います。

#### ー 最後に、トップエスイープロジェクトに一言お願いします。



受講中は大変でしたが、熱心な講師陣に支えられて、貴重で楽しい経験を得ることができました。第一期生の教育経験に基づき、トップエスイープロジェクトの教育内容も年々進化していると伺っています。今後も、修了生も対象とした勉強会、さらには懇親会など、楽しみにしております。

産学のギャップを埋める有益な活動ですので、ますますの発展を期待しております。

#### ー 本日はどうもありがとうございました。

2007年11月 国立情報学研究所にて（聞き手：野中誠）